

GIGAスクール時代の情報教育

多様なデジタルメディアやサービスが次々に生まれ、身の回りを多くの情報が飛び交う現在、情報との向き合い方は、道徳科でも重要な課題です。今回の特集では、これからの情報モラル教育と、メディアと社会との関わりについて考えます。

【対談】

情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育

GIGAスクール構想を契機に、これまで進められてきた情報モラル教育をよりよく見直していこうという議論が進んでいます。

長年、情報モラル教育に携わってきた三宅健次先生と、ITジャーナリストの高橋暁子先生に、子どもとメディアの関わり方のこれからについて話し合っていました。



三宅健次

Kenji Miyake

千葉大学客員教授・教育学部附属中学校副校長。文部科学省主催「メディア教育指導者講座」の講師や「情報モラルに関する指導の充実に資する調査研究」等の委員を歴任。光村図書小・中学校「道徳」教科書編集委員。



高橋暁子

Akiko Takahashi

ITジャーナリスト。成蹊大学客員教授。SNSや情報リテラシー教育が専門で、NHK「あさイチ」「クローズアップ現代+」等に出演。『小学生から知っておきたいネットのルール』（監修／新星出版社）等の著書がある。

親世代と子ども世代のギャップ

三宅 「情報モラル」という言葉が義務教育の中に登場したのは、1998年に告示された中学校学習指導要領の技術・家庭科からでした。道徳では、2008年告示の小学校学習指導要領で、初めて情報モラルが取り上げられ、そこでは「情報モラルに関する指導に留意する」とされました。「特別の教科 道徳」となった2015年の小学校学習指導要領では、情報モラルは、「留意する」から、「充実する」となり、より重視されるようになりました。改めて振り返ると、今の子どもたちの親世代は、実は、情報モラル教育をほとんど受けてこなかった世代といえます。

高橋 そうですね。親世代は、使っ

てきたメディアも今の子どもたちと違いますし、仕事で部分的に知っているとしても、メディア全般について詳しいわけではありません。それに対して、子ども世代は、新しいメディアに飛びつく傾向にあり、柔軟に利用しています。そんな子どもたちが、親の目をかいくぐって使っていることからくるトラブルが多いように感じます。近年、よく相談を受けるのが、子どもにスマートフォンを持たせてよいか、利用する際にどう見守ればよいかということです。

三宅 やはり、スマートフォンの取り扱いが問題になるようですね。サービスを提供する側は、どう対応しているのでしょうか。

高橋 メディア側からすれば、スマートフォンも、各種サービスやアプリも、利用してもらえばもらうほど利益が出るので、基本的には、「自由に使い放題」というのが従来のスタンスでした。しかし、2018年に、WHOが、ゲーム障害を国際疾病とする方針を示してから、潮目が変わりました。以降、ペアレンタルコントロールを実装した機器やサービスが定着しました。「制限できるよう

にしたので、使ってください」という考え方です。しかし、保護者側の認知度がまだ低いのが現状です。フィルタリングや利用時間制限などのペアレンタルコントロール機能を知らずに、「子どもが長時間使って困る」という相談を多くもらいます。

GIGAスクール構想の中で

高橋 ところで、GIGAスクール構想がコロナ禍で前倒しになり、1人1台端末が整備されました。学校現場での受け止めはいかがでしょうか。

三宅 まず、子どもたちのインターネット利用について振り返ると、何段階かのフェーズがあったと思います。家庭にインターネットが普及した頃は、ネットの閲覧、電子メールや掲示板を利用するくらいで、問題も、せいぜいそこにいたずらを書き込むといった程度でした。その次に、携帯電話が登場し、2000年代は、女子中学生の間で、「プロフ」が流行しました。その後、スマートフォンの普及率が一気に上がります。これが大きな変化でした。SNSの利用が広がり、それに伴って、今までの情報モラル教育では抑え切れないよう

な問題が多発するようになりました。

高橋 そこに、GIGAスクール構想が重なってきたのですね。

三宅 はい。これまでは、スマートフォンを子どもに持たせるかどうかは、各家庭の判断だったので、学校側は、「スマホの問題は保護者の責任ですよ」と言えばよかったのです。ところが、学校側が導入した1人1台端末になると、学校の責任は大きくなります。端末を持ち帰って、家

デジタル・シティズンシップとは

デジタル・シティズンシップは、各国で取り入れられており、国によって盛り込まれる要素が異なるが、以下の9要素が一般的なものである。デジタル・シティズンシップ教育は、これらを実現するためのもので、要素を見ると、日本の情報モラル教育と重なる部分も多い。

- ① 平等なテクノロジーへのアクセス。
- ② インターネットでの安全な売買。
- ③ 情報をインターネット上で適切かつ安全に共有、協働。
- ④ デジタル・リテラシー、メディア・リテラシー、情報リテラシー。
- ⑤ 礼儀正しい行動規範によるテクノロジーの利用。
- ⑥ インターネット上で見つけたテクノロジーやコンテンツの合法的な利用。
- ⑦ インターネットの自由と責任。
- ⑧ デジタル世界における身体的・心理的健康。
- ⑨ インターネット上の安全。

庭でゲームばかりしているといった相談が寄せられることもあります。今までは、ICT担当の先生や生徒指導の先生に任せていた問題に、全ての先生が関わらなくてはならなくなってきたのです。

高橋 コロナ禍で端末の整備が前倒しになったこともあり、先生へのICT研修が足りていないという声もあります。知識が十分でなく不安だ、対応し切れていないかもしれないという悩みも聞きます。これから、学校現場で、どのように端末が使われていくのか、気になるところです。

三宅 そうですね。実は90年代、各学校にコンピュータ室が設けられたとき、多くの学校では、コンピュータの授業時以外は施錠していたようです。休み時間に使わせると、逸脱した使い方をする子どももいて、その指導が大変だという理由です。1人1台端末になった今、同じ考えでよいのだろうか、という気がします。子どもに自由に使わせるという方向にシフトできるかどうか、その覚悟が求められるのではないかと思います。

情報モラル教育とデジタル・シティズンシップ教育

三宅 これまでの情報モラル教育は、やむをえない状況があったとはいえ、「～してはいけない」「～しないほうがよい」という文言が多用され、「べからず集」的なものが多かったようです。これでは、デジタルメディアに対して、ネガティブな見方をもってしまうでしょう。そこで、今、注目されているのが、デジタルメディアを積極的に、ポジティブに活用していく「デジタル・シティズンシップ」という考え方です。

高橋 「シティズンシップ」、つまり、「市民性」と関連した考え方なんです。

三宅 はい。「デジタル・シティズンシップ」という言葉は、欧米で生まれました。欧州評議会では、「効果的なコミュニケーションと創造力を用いて、デジタル環境に積極的、批判的かつ的確に関わり、責任をもって情報技術を用い、人権と尊厳

を尊重した社会参加を実践する能力」とされています。欧米では、「シティズンシップ（市民）教育」が定着しています。そこに、「デジタル」という要素を加えたものと考えてください。すでに、現代社会は日常生活自体が情報化、デジタル化されています。このような現代の状況を取り込んだうえでの「シティズンシップ（市民性）」ということです。

高橋 「人権と尊厳を尊重した社会参加」を掲げているところがポイントですね。

三宅 そうです。「デジタル・シティズンシップ」教育では、もちろん情報モラル的な内容も扱います。しかし、ポイントは、社会人、市民としての在り方を問題にしているところです。社会人としての心構えを身につけていく中で、ネット上の振る舞いやスキルも身につけよう、ということです。自分が、外に向かって、役立つ社会人になっていくことを目指すのですから、リスクがあってもどんどん活用していくという考え方です。負の部分よりも正の部分を使

ばすように使っていくというスタンスなのです。

高橋 例えば、「ネット依存」の問題に対しては、これまで「～しない」という行動抑制を求めていたと思います。デジタル・シティズンシップ教育の考え方では、この問題をどのように捉えていくのでしょうか。

三宅 デジタル・シティズンシップ教育では、自分の生活スタイルの中で、自分の「メディアバランス」を考えていきます。現在、メディアもいろいろありますから、1日の中で、どのメディアをどのくらいの時間、どんな目的や理由で使うのかを考え、自分で使い方を調整するのです。

高橋 周りが、「1日〇時間まで」と決めるのではなく、自分自身で考えるのです。

三宅 そうです。時には、友達と自分のメディアバランスを比較してみることも大切です。友達がどのような意識でメディアを使っているかを知り、それを受けて、自分はこうしよう、と考えるのです。友達は将来、ゲーム制作者になりたいから、ゲー

ムのプログラミングを何時間もやっている。自分は音楽が好きだから、ネットで世界の音楽を聴く。人によってそれぞれメディアの使い方は違ってよいはずですが。社会にも目を向け、また、違いを認め合いながら、自分だったら、どのようにメディアを使うかを考えるのです。

高橋 従来の情報モラル教育が、デジタル・シティズンシップ教育に取って代わるということなのでしょう。

三宅 両者は、理念や背景が異なります。置き換わるということではなく、これまでの情報モラル教育に、デジタル・シティズンシップ教育の視点を取り込みながらやっていけばよいと、私は考えています。

自律的にメディアに関わる

三宅 ポジティブにデジタルメディアと付き合っていく事例は、高橋先生が普段、接している大学生にもよく見られるのではないのでしょうか。

高橋 はい。中学生は夢中になりすぎてトラブルに陥ることが多いよう

ですが、高校生、大学生は、効果的に活用していますね。試験勉強の期間はSNS断ちをしたり、アプリを削除したりして、自己管理し、また、塾などが配信するYouTubeの学習用動画や、「スタディサブリ」といった学習用のアプリを活用する学生もたくさんいます。

三宅 自律的な付き合い方ができているようですね。

高橋 そうです。最近の若者は、かなり早い時期からデジタルメディアを使い始めていることもあり、途中で自分の依存状態に気づいています。はまり込まないように、どうしたらよいか試行錯誤しています。「シティズンシップ」というところまではいいませんが、折り合いをつけながらうまく使っているようです。ネットの利用時間が長かろうとも、自分の心身や生活に悪影響がなく、目的とすることができればよいという意識のようです。

三宅 まさに、負の部分ではなく、正の部分を伸ばしていくという発想ですね。



高橋 そうですね。確かに、学生から、ネット詐欺の被害やSNS上の対人トラブルについての話も聞きます。しかし、彼らはそれでも、「怖い」というよりは、「便利だ」と捉えています。使いこなせば効率もよく、自分にグッと響けば何も悪いことはないという考えです。

三宅 中学生も同じです。彼らにとって、友人関係は非常に大切なものです。その友達とのつながりを保つ便利なツールとして、SNSがあれば、子どもはそれを使うことを選びます。多少、失敗を経験しても、「使わない」という選択肢はありません。大人だったら、何か失敗をすると、懲り懲りだとなりがちです。しかし、子どもや若者はそんなふうにはネガティブにはならないものです。

高橋 大学生ぐらいになると、みんな多かれ少なかれ失敗しています。失敗からしか学べないこともあります。悪い大人とつながらないようにすることと、命に関わることをカバーして、あとはどんどん使わせていけばよいのではないのでしょうか。

三宅 同感です。やる前から行動を制限してしまうと、ネット社会でたくましく生きていく力をつかないのではないかと考えます。

高橋 先生の学校では、デジタル・シティズンシップ教育の考え方を生かした実践は行われていますか。

三宅 私の勤務校では、「ICT推進生徒委員会」というものを立ち上げ、1人1台端末の管理を生徒自身に任せています。生徒たち自身で「未来につながる、品位と思いやりあるICT活用」という目標を掲げ、ルールを設けました。当然、休み時間も使用可で、うまくいかないことがあると、放送で、「もっとこうしてください」などと呼びかけています。自分たちで作ったルールだから自分たちで守る、というスタンスです。

高橋 まさに、「シティズンシップ」につながっていく活動ですね。

三宅 もちろん、学校や自治体によって状況は違うでしょうから、学校ごとに、可能な範囲で対応していくことが大切だと思います。

道徳科で何ができるか

高橋 今、ネット上には、フェイクニュースもあまた見られ、その情報は玉石混交です。また、フィルターバブル^{*1}や、エコーチェンバー現象^{*2}などによって、偏った情報にとられる危険性も大きくなっています。しかし、三宅先生と話してきたように、危険があるからいっさい使わない、ということにはならないでしょう。

三宅 道徳科では、どんなことができるでしょうか。

高橋 私は、道徳の専門家ではありませんが、日頃から、意見が分かれることについて話し合わせることが大事だと思っています。大学でも、なるべく「正解」がないことについて話し合わせています。一つのことに對しても、見方や立場によって、意見が違うということを感じる経験を重ねていく。価値観やものの見方は、人によってばらばらで、正解は一つじゃない。自分とは違う見方も受け止め、そのうえで、自分がどうすればいいかを考えることが大事です。これは、まさに道徳の授業だからこそできることだと思います。

三宅 私も同じように考えています。現代は、多様性が求められる時代。答えは一つではありません。その中で、自分ならどうするかということを考えさせることが大切です。デジタル・シティズンシップは、多様性を認め、そのうえで、自分ならどうするかを考えていくというスタンスです。道徳科で情報モラルを扱うときには、こうしたデジタル・シティズンシップの考え方も取り入れていきたいと考えています。



※1 インターネット上の検索エンジンはその仕組み上、使用履歴に応じて、各自の好みに合った情報が優先的に表示される。このことによって、自分と異なる意見やさまざまな情報に触れることがなくなっている状態を指す。米国のイーライ・パリサーによる造語。

※2 SNS上で考え方の似た者どうしが交流し合うことによって、特定の意見や思想が増幅され、より偏った方向に向かってしまうこと。